

目的 着心地よい衣服を追求していく上で着装中に生じるしわを減じることが、現在の課題である。先に肘部のしわについて、袖山の高さ、気温、着用時間を取り上げ実験した結果を報告したが、本研究では、肘部のしわのパターン上の要因を検討するために、種々のパターン（文化式：B，ドレメ式：D，モード式：M，田中式：T，柳沢式：Y）による実験を行った。

方法 実験は、次の組合せの実験服で行った。

実験服は、40番綿ブロードを用いて、普通寸法で作成した。形式は、長袖、衿なし、前あきである。

着じわは、通常、普通寸法の既製服を着用している

本学女子学生が、被服構成実習中に60分間着用して付与したものを写真に撮り、上記実験服No.1, 2, 3, 4を基本型、No.5, 6, 7, 8とNo.5, 9, 10, 11をそれぞれ変則型①, ②として各々のグループにおいて一対比較法で判定を行った。

結果 基本型の場合、実験服間に差は認められたが、肘部の着じわ発生の要因を限定することは困難であった。変則型①の場合、実験服間に顕著な差が認められた。これは、袖幅に由来するものと考えられた。変則型②の場合、実験服間の差は、基本型の場合より小さく、身頃の差異は肘部の着じわには直接影響しないものと考えられた。

実験服 No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
身頃	B	D	M	T	Y	Y	Y	Y	B	M	T
袖	B	D	M	T	Y	B	D	T	Y	Y	Y